

南インド N G O 活動の事例から検討する社会福祉と社会開発の融合への試み

日本福祉大学大学院 倉持 香苗 (会員番号 1 9 3 7)

1 : 研究の目的

近年の国際化は、社会福祉領域にも大きな影響を与えている。国外で生活をする人の数が増加しただけでなく、我が国で生活をする外国人が増加し、それに伴う問題に対する対応が求められている。例えば、近隣との付き合いがた、ゴミ出しの方法など生活に関わる問題、医療問題、就労問題、子どもの通学における問題など、その範囲は広がる傾向にある。また、地震や津波などの発生時には、その国内だけでなく国外からも救援活動を行うなど、地球規模での対応がなされる時代である。さらに、こうした国際化の時代において社会福祉を学ぶ学生の中には、卒業後国外で仕事をしたいという者がおり、その中には、開発途上国で地域開発に関わりたいという希望を持つ者もいる。

このような時代において、社会福祉を学ぶ視点には、国際的な諸問題やその解決のために活かせる社会福祉の方法、そのための他領域との方法論の比較などが求められると考えられる。しかし現状では、それらを学ぶことができる国際福祉論を設置する学校は多くはなく、さらにその内容についても、海外の社会福祉制度を紹介したり、アジアにおけるストリートチルドレンなどの諸問題の事例紹介にとどまっているなど、具体的な活動論について検討される場が少ないように思われる。

社会福祉のアプローチは、住民主体、エンパワーメントなど、その人が持つ力をいかに引き出すかが問われるようになった。一方、社会開発は経済開発から人間開発へと変遷した経緯の中で、住民主体、エンパワーメントなどが着目されている。社会開発に関わる専門分野は多岐にわたっており、他領域から社会福祉へとアプローチが変化しているように見受けられる。国際化の時代において、住民が主体となる地域活動の方法論に着目し、社会福祉の方法論と社会開発の方法論の接近を試みることは、社会福祉の新しい視点につながるのではないかと考える。

本報告では、インド南部の N G O 活動の事例から、住民が主体となる地域活動に伴って変化した村の環境、人々の生活、ソーシャルワーカー自身の変化から、社会開発における社会福祉の視点を検討し、社会福祉と社会開発のアプローチの融合の可能性を試みる。

2 : 研究の方法と内容

今回考察するインド南部の村は、10 年以上前、貧困問題だけでなく、宗教や身分制度に基づく問題、干ばつによる水の確保、農作物への影響、乳幼児の健康問題、子どもの教育問題など課題は山積みであった。現在は多くの課題が解決され、改善されている。また、それと同時に、その活動に関わった村のソーシャルワーカー自身にも変化があった。その変化を時系列的にまとめ、何がきっかけとなり地域や人々が変化したのか、考察をおこなう。

3 : 結論

我が国の社会福祉で取上げる課題と、社会開発で取上げる課題は、全く異なるように考えられがちであるが、決してそうではなく、人々の力を引き出して生活の場である地域を変えていくという視点に立つと、その方法論は類似している箇所が多いと考えられる。

特に、人々が主体的に活動をおこないながら地域の諸問題を解決するには学習がキーワードになると考えられる。学びを中心としたアプローチと人々の潜在的な力、地域の変化についてさらなる考察が必要であり、国内外の地域活動に当てはめながら、社会福祉と社会開発のアプローチについてさらに検討する必要がある。